

小児慢性疾患における多職種連携

長尾みづほ[†]第74回国立病院総合医学会
(2020年10月17日～11月14日WEB開催)

IRYO Vol. 76 No. 4 (280-283) 2022

要旨

かつての国立病院機構の小児慢性疾患病棟は喘息や慢性腎疾患など単一の疾患で占められて管理は比較的容易であったが、現在は疾患構成や背景因子が多様となり、心理社会的な因子に配慮しながら、よりテーラーメードな治療管理が求められるようになった。このような病棟では、医師、看護師、保育士、児童指導員、栄養士、調理師、薬剤師など多職種のチームワークは欠かせない。特別養護支援学校に通学しながら治療を継続するような施設では、学校側との話し合い、協力も欠かせない。

長期入院のメリットは、目に見えている患者の疾患だけではなく、外来診療で治療を困難にしている患者背景を明らかにし、退院後も疾患が良好にコントロールされるには何に介入すべきかを検討できることである。家庭環境が複雑な場合には教育現場や行政ともネットワークを作り、患児に主病名以外に発達障害が隠れていた場合には治療アドヒアランスを良好に保つための心理療法的な介入が有効である。また、患児自身も病院で集団生活を送ることにより、他者への思いやりや、自分自身の疾患に前向きに取り組む姿勢がみられ、自己効力感が向上する。

このような取り組みを広く認識してもらい、多職種連携を充実していくことが必要である。

キーワード 小児慢性疾患, 多職種

はじめに：歴史とニーズの変化

小児慢性疾患とは、小児期に慢性疾患が発症し長期間にわたり医療を必要とするものである。疾患分野は悪性新生物、慢性腎疾患、慢性呼吸器疾患、慢性心疾患、内分泌疾患、膠原病、糖尿病、先天性代謝異常、血液疾患、免疫疾患、神経・筋疾患、慢性消化器疾患、染色体または遺伝子に変化をともなう症候群、皮膚疾患、骨系等疾患、脈管系疾患、病的肥満、心身症、発達障害など多岐にわたる。国立病

院機構では独立行政法人化前、旧国立療養所に小児慢性疾患病棟の機能をもつ病院がいくつかあり、長期に入院加療を要する児への医療に大きな役割を果たしてきた。たとえば、吸入ステロイドが普及する前の時代では、重症気管支喘息児の「最後の砦」として、長期施設入院療法を行ってきた。慢性腎疾患児も長期に入院しており、当時の治療方針は安静を第一としていた。治療の進歩によりこれらの疾患については多くの児が外来でコントロールが可能になり、入院患者は激減したが、現在は、摂食障害や肥

国立病院機構三重病院 臨床研究部 [†]医師

著者連絡先：長尾みづほ 国立病院機構三重病院 臨床研究部 〒514-0125 三重県津市大里窪田町357

e-mail : nagao.mizuho.yt@mail.hosp.go.jp

(2021年7月26日受付, 2022年8月5日受理)

Multidisciplinary Collaboration in Pediatric Chronic Diseases Care

Mizuho Nagao, NHO Mie National Hospital

(Received Jul. 26, 2022, Accepted Aug. 5, 2022)

Key Words : pediatric chronic diseases, multi-occupational collaboration, allergy